

Nicholas Rowe, ‘Some Account of the Life, & c. of Mr. *William Shakespear*’ の試訳

— Rowe の原版(1709) と Alexander Pope による改訂版(1725)—

五十嵐 博 久

試訳に際しての緒言

ニコラス・ロウ (Nicholas Rowe) が編集した『シェイクスピア著作集』(1709) 全6巻は、18世紀最初の「校訂版」シェイクスピア作品集として知られる。この作品集の巻頭には、‘Some Account of the Life, & c. of Mr. *William Shakespear*’ と題するロウの「シェイクスピアの評伝」が付されている。この評伝は、18世紀後期のエドモンド・マローン (Edmond Malone) の時代まで何度も再版され、広く読まれていた。1725年以降は、ロウの『シェイクスピア著作集』を改訂したアレグザンダー・ポープ (Alexander Pope) がこれにやや恣意的な (と思われる) 編集を加えたものがより広く出回っていた。つまり、厳密に言うと、ロウの「シェイクスピアの評伝」には2つの版が存在していたが、違いを意識する読者はほとんどいなかった。シェイクスピアが正典となりつつあった18世紀前半は、シェイクスピアの「伝説」に人々がしだいに関心を寄せはじめた時代だったが、記述の細部にまで拘るような「伝記マニア」が存在する時代はまだ先のことだった。しかし、現代では、この2つの版の違いを明確にしておくことは、18世紀初期における「シェイクスピア」伝説の創成過程を振り返るうえで重要である。

ここに翻訳したのは、ロウの「シェイクスピアの評伝」の全文である。ポープが削除・校訂した箇所もひと目でわかるようにした。翻訳に使用した底本は、Nicholas Rowe, ‘Some Account of the Life, & c. of Mr. *William Shakespear*’, *The Works of Mr. William Shakespear; in Six Volumes* (London, 1709) [ESTC: T 138296], I. pp. I-XL である。翻訳に際して、ポープの改訂版 (‘Some Account of the Life, & c. of Mr. *William Shakespear*. Written by Mr. Rowe’, *The Works of Shakespear in Six Volumes* [London: 1725], I. pp. xxv-xli) を参照している。ロウの『シェイクスピア著作集』には全9巻の別版 (1714) もあるが、この版にみられる異同は微細な字句の修正等のみであるため、訳文には反映させていない。下線部はポープが削除した箇所である。{ } はポープの改訂版で場所が移動したことを示し、

移動先を {***} の記号で示している。〔 〕は翻訳者の注釈である。

「ウィリアム・シェイクスピア氏の生涯とその他についての若干の所見」(試訳)

非凡な人物、特にその英知と学識によって知られる人物については、著作を後世に遺すと同じように、その人となりをも後世に伝えることも、私たちが敬意として示すべきものであるように思える。過去の偉人にまつわる個人的で些細な事柄を解明する人々は甚だ愚かだと思えるかもしれないが、偉人の家族や誰の生涯にでも起こりうるような出来事、そして彼らの容姿やいでたち、特徴までもが批判的考察のテーマとなってきた理由はそこにある。このような事に興味を抱くのはつまらないと思われるかもしれないが、しかしそれはごく自然に湧き起こる関心といって良い。そして、私たちは所見を書くに値する偉人に興味を抱けば、その興味は尽きることなく、「その人物が身に纏っていた服に至るまで細かい描写さえも読み」たくなる。文人の評伝は、その著作についての理解を深める助けとなることもあるだろう。シェイクスピア氏の著作については、作者の評伝など必要はないと考える人も多いかもしれないが、ささやかな評伝が添えられていることが不適切であるということもないだろう。

シェイクスピアはジョン・シェイクスピア氏の子であり、1564年4月、ウォリックシャーのストラットフォード・アポン・エイヴオンに生まれた。この町の記録簿や公文書から浮かびあがるシェイクスピア家は毛並みも羽振りの良い一家であり、また、紳士の身分であったことも触れられている。父ジョンは大量の羊毛を商っていたが、男女合わせて10人の子供がいる大家族を有していたため、シェイクスピアは長男であったが、ジョンは彼に家業以外の教育を施すことはできなかった。ジョンはシェイクスピアをしばらく無償の学校に通わせたことは事実である。そこでシェイクスピアは〔後にベン・ジョンソンに擲擻されることになる〕少しばかりのラテン語の知識を身に付けた可能性が高いが、一家が置かれた経済的境遇により、家業を手伝わせる必要に迫られ、ジョンはシェイクスピアを退学させた。それによって、不遇にも、シェイクスピアはラテン語をそれ以上磨くことができなかったのである。シェイクスピアが古典詩人たちについて知識を持たないことは、彼が学校を中退したという理由からだけでなく、彼の著作に古典詩人を模倣したと思われる箇所がまったくみられない事実からすぐにわかる。シェイクスピアの繊細な嗜好と、そして最も優れた古典詩人を凌駕するとは言えなせよ互角の詩才は、自ずと彼を古典詩人の作品へと誘ない、彼はそれらを楽しんで読み、研究しただろう。古典作品の

優美なイメージがシェイクスピア作品に影響を与え、とり込まれたことは確かだ。シェイクスピアは古典詩人を読まなかったと主張する人がいるが、そうではなく、古典詩人をそのまま真似ることをしなかったのである。シェイクスピアが古典に倣わなかったことの是非については、議論の余地があるかもしれない。古典の知識があれば、より正しく書くことはできたかもしれないが、正しさにこだわって、古典に倣い、その規則に服従すれば、私たちがシェイクスピアを称賛する所以であるその鋭い想像力、激情、そして奢侈な美しさを抑制してしまったかもしれない。私が思うに、シェイクスピアの想像力が豊富に生み出す思想は、斬新で、それまでの文学が扱ってこなかったものだが、それらはギリシアやローマの詩人たちの最も美しい言葉で表現されるより、シェイクスピアが書いたままの方が良い。シェイクスピアは、英語の達人だけが書ける最もふさわしい言葉でその思想を言い表している。彼がいくらかのラテン語の知識を有していたことは間違いなく、どれだけラテン語を読んでいたかは、芝居の様々な部分から窺える。『恋の骨折り損』では学校教師がマントウアンの詩を誦んじ、『タイタス・アンドロニカス』ではゴート人王子が

清く正しき者は、
ムーア人の弓矢を必要とせず

という文を読んで、これはホラティウスの詩で、文法学校の教科書で学んだのを覚えていると述べている。おそらく、シェイクスピア自身もホラティウスのこの詩を文法学校で学んだのだろう。¹ラテン語がどの程度だったかはさておき、芝居のあちらこちらにフランス語の単語や文章が多く使われていることから、シェイクスピアはフランス語も理解できたことは確かだ。特に、『ヘンリー五世』では、ひとつの場面がフランス語だけで書かれている箇所がある。学校を退学した後は、シェイクスピアは父親の提案に従って人生を歩みはじめたと思われる。シェイクスピア家のしきたりに従って身を固めるには、若いうちに結婚すべきと考えたのだろう。シェイクスピアの妻は、ハサウェイという人物の娘だった。ハサウェイは、ストラットフォード近隣地区に住む裕福な郷士だったと伝えられている。シェイクスピアはそうした安定した生活をしばらく続けたが、彼のある突飛な行動ゆえに町を去り、歩みはじめた生活も失うことになった。その罪は、彼の品行を汚し、そして彼自身にとっては悲運であった。しかし、後になってみると、これこそが詩劇界で比類のないひとりの天才を世に送り出す契機だったと言える。若者にはよくありがちな悲運だが、シェイクスピ

アには不良仲間がいた。その中に頻繁に鹿泥棒をする者がいて、その者がストラットフォード近郊の土地シャーロットのトマス・ルーシー卿の私園での泥棒にシェイクスピアを一度ならず誘った。ルーシーはシェイクスピアを起訴したが、シェイクスピアはそのやり口が厳しすぎると考え、不当な扱いへの腹癒せとして、ルーシー卿を唄ったバラッドを書いた。このバラッドこそがシェイクスピアの最初の詩作だったと思われるが、これは今となっては残っていない。しかし、この詩は非常に辛辣なものであったため、ルーシー卿はその分を上乗せして厳しく訴追した。その結果として、シェイクスピアはしばらくの間ウォリックシャーの家業と家族のもとを離れ、ロンドンに避難することになったのである。

シェイクスピアはこのときこの事件があってこそ、演劇の世界を知ることになったと伝えられている。最初は下積みの身分であったが、一座は彼を仲間として迎え入れた。シェイクスピアはすぐに演劇世界でその賞讃すべき才能を発揮した。すると、すぐに彼は、非凡な役者にこそならなかったが、優れた劇作家として他の者たちを凌駕した。いくつかの古い芝居の冒頭には、当時の慣習に倣って、他の役者たちとともにシェイクスピアの名前が印刷されている。しかし、シェイクスピアがどの人物を演じたのか私も調べてはみたのだが、彼の演じた最高の演技は自作の『ハムレット』に登場する亡霊を演じたものだったことを除いて、他にどの人物を演じたかという記録はみつからなかった。シェイクスピアが最初に書いた芝居がどの作品だったのかについても、確たる証拠をもって知ることはできなかった。シェイクスピアのような人物の想像力が最初に創作したものはどのようなものだったのか、それは私と同じロマンを抱く者なら誰しもが知りたいと願うことだろう。しかし、他の作家についてなら、もともと不完全な作品の中からその処女作を捜し当てることはできるかもしれないが、シェイクスピアについてそれはたぶんできない。彼の作品の場合、「技巧」の比重が極めて低い一方で、その天賦の才能によって書かれた部分の比重が高い。したがって、私を知る限りでは、若き日のシェイクスピアの作品こそ最も力強く、そして靈感と想像力に富み、最も素晴らしいのである。シェイクスピアの想像力が自由奔放であるがゆえに、彼にはまったく分別はなく、規則も無視してしまっているというのではない。そうではなく、彼の思いつきは、概してとてつもなく素晴らしく、そしてそれじたいでじっくりくる言葉に収まっているがゆえ、手直しはあまり必要ないか、あるいはまったく必要はない。偏りのない目で判断すれば、そのままが良いことは一目瞭然だ。ドライデン氏

は『ペリクリーズ』がシェイクスピアの初期の芝居のひとつと考えていたらしいが、そう考えるのは思慮に乏しい。というのは、この芝居は、一部は確かにシェイクスピアの手になるもので、特に最終幕はシェイクスピアのものと考えられるが、シェイクスピアが書いた部分が最も少ない芝居であるといえる根拠が十分にあるからだ。シェイクスピアの芝居がどのような順番で書かれたのかはわからないかもしれないが、いくつかの芝居には書かれた時期が特定できると思える箇所はある。例えば、『ヘンリー五世』第5幕冒頭の口上はエセックス伯への見事な賛辞となっているが、このことから『ヘンリー五世』が書かれたのは、伯爵が女王陛下の名代としてアイルランド将官を務めていた頃だとわかる。『ヘンリー八世』の最後の場面でエリザベス女王とその王位を継承した国王ジェイムズへの賛辞が述べられるのは、この芝居はジェイムズがイングランドの王位を継承した後に書かれたことの証左である。書かれた正確な時期がいつであれ、芝居のような気晴らしを不思議なほどに好むようになっていた当時の人々は、おべっか上手で、かつ才能に恵まれ、彼らの好む娯楽をどんどん提供してくれる天才が名声を得てゆく姿を目にするのは、嬉しかったであろう。シェイクスピアは詩才にも恵まれていたが、人柄も良く、物腰も柔らかく接して心地の良い人物だった。つまり、そのような資質を備えていれば、この時代の最もやんごとなき人々の会話を間近で聴く機会にも恵まれたことだろう。エリザベス女王は彼の芝居を何本か御前上演させているが、そのとき間違いなく、女王は彼に多くの褒章を与えている。シェイクスピアはこう書いている。

西の国で王位につかれし、美しい処女王

——『夏の夜の夢』

当時、この「処女王」がエリザベス一世を彷彿させたことは明白である。

しかも、この台詞はとても適切な場面に盛り込まれた賛辞で、うまい具合に女王陛下にあてつけたものである。女王陛下はまた、『ヘンリー四世』・第1部と『ヘンリー四世』・第2部に登場するフォールスタッフの見事な描かれ方がお気に召され、この人物が登場する芝居をもう1本書くようにとお命じになり、さらにこの人物が恋をした姿を描くようにともお命じになった。この勅命によって、シェイクスピアは『ウィンザーの陽気な女たち』を書いたと伝えられている。シェイクスピアがどれだけ忠実に要求にこたえたかは、出来あがった芝居をみればよくわかるだろう。今となっては、フォールスタッフという劇中人物がもともとはオールドカッスルの名前で書かれたという伝説があることを

この場で紹介しても許されるだろう。しかし、当時はまだオールドカッスル家は滅んでいなかったため、女王陛下は改変をお命じになり、シェイクスピアはそれに従ってフォールスタッフという名前を用いたのだった。名前を変えたことで、直ちにシェイクスピアが不敬罪に問われることはなかった。しかし、フォールスタッフという名前を使うことで何も誹りを受けなかったかどうかはわからない。というのも、ガーター騎士であり中将のサー・ジョン・フォールスタッフの名は、ヘンリー五世と六世の御代においてフランスの合戦で優れた武勲をあげた人物の名であったからだ。女王陛下がどれだけのご寵愛をお示しになったかは別として、シェイクスピアがその文才を世に示して幸運をつかむことができたのは、女王陛下おひとりの恩寵によるものではなかった。サウサンプトン伯爵もシェイクスピアに並々ならぬ恩寵と友情の御印をお与えになっている。伯爵は、この時代の歴史を記した数々の書物では、不幸な最期を遂げられたエッセクス伯爵と友好関係を保たれたことで有名だ。シェイクスピアは自ら出版した唯一の詩作品である『ヴィーナスとアドニス』を、この高貴な伯爵に捧げている。シェイクスピアの芝居は、その生前にいくつも出版されているが、どれもみな不正に出版されたもので、本文の状態も粗悪なものである。パトロンとなられたサウサンプトン伯爵は、シェイクスピアに非凡なる御厚情をお示しになったことがある。そのことをよくご存じだったと思われるウィリアム・ダヴェナント卿が伝えたものだという確信があるので、私は敢えてそのことに触れるのであるが、伯爵はシェイクスピアが望んでいたものを購入できるようにと、1,000ポンドをお恵みになったことがある。このような高額な報奨金は、どの時代であっても稀で、現代の人々がフランス人の踊り子やイタリア人の宦官²に示している寵愛に匹敵するものである。

シェイクスピアが私生活において人々とどのように付き合い、友好関係をもっていたかについて私が知りえたことはひとつである。それは、才能の真価がわかり人の善し悪しが区別できる人間であれば誰しもがたいはいはシェイクスピアを正当に評価し、また彼に好意的であったということだ。最も優れた学殖と洗練された教養を有する人々が彼の才能を賞讃したように、やんごとなき貴族たちもまた、シェイクスピアの誠実で好感度の高い人柄に魅了され、好意を示したに違いない。「ミューズの涙」においてシェイクスピアに言及した比類なき文士エドモンド・スペンサーもそのひとりだったが、彼は、シェイクスピアを優れた詩人として賞讃するだけにとどまらず、シェイクスピアが仲間ではないことを哀しんでさえいる。その一節は、劇詩の衰退と当時の演劇界が受

けていた非難に対するターリアの嘆きが綴られた、『種々雑多なる書き物』の
147 頁にみえる。

そして、あの者は、
自然自らが自身を欺く目的で造り給いしあの者は、
真理がその模倣の姿をみたいと欲して造り給いしあの者は、
ああ！私たちが悦ばせてくれるウィリーは、死んでしまった。
そして、ウィリーとともに、喜びと享樂はすべて失われ、
皆が悲しみに濡れている。

あの者を失った代わりに、
酷い悪口屋と嘲る愚か者たちの批判が這い回り、
外聞もない下品な言葉で、分別もなく
形式を無視した韻文を吐き散らしている。
くだらない詩人たちは皆、好き勝手に詩を書き、
学殖ある者がすべきことを我が物顔でおこなっている。

しかし、かの紳士はというと、
その筆からは大量の蜂蜜と甘い果汁が流れだし、
卑しい生まれの者たちが
無分別に吐き出す愚かな言葉をはねつける。
彼は、無駄な骨折りをしてそれを売ろうとはせず、
心穏やかに書齋に居ることを好む。

スペンサーはシェイクスピアより 20 年前に没しているのだから、この引
用の最初の連にみえる「ウィリー」はシェイクスピアのことではない、と考
える学者もいることは承知している。しかし、この詩が書かれた時代には描
写があてはまる人物が他にいないという理由を別にしても、引用の最後の連
を読むと、スペンサー氏はウィリーが文字通り死んだとは言っていないこと
がわかる。町人たちの趣味が悪くなり、演劇をとりまく環境が悪くなったた
めに、ウィリーは公の場から退いたか、もしくは少なくとも筆を執るのを辞
めていた、と言っているのである。ドライデン氏は、この詩はシェイクスピ
アのことを言っているといつも主張していたが、その可能性は極めて高い。
スペンサーが亡くなったときシェイクスピアは 33 歳だった。そして、その

頃までに彼は、詩人として、ここに述べられた賞讃の言葉に十分に値する名声を得ていたに違いない。ベン・ジョンソンとの邂逅も、シェイクスピアの人間味溢れる良い人柄を窺わせるものだった。当時まだ世間でまったく知られていなかったジョンソン氏は、自分が書いた芝居のひとつを一座に提供し、それを上演してもらおうとした。すると、ジョンソン氏からその原稿を受けとった役者たちは、それを手荒に扱い、横柄な態度で裏表を眺めると、一座の益にはならないと乱暴に言い放って、ジョンソン氏に返そうとした。そのときジョンソン氏の原稿をたまたま目にしたシェイクスピアは、その芝居に何らかの美点を見つけ、最初から最後まで集中して読み終えると、ジョンソン氏とその著作を人々に薦めたのである。こうしてふたりは、公然と友好関係を持ったのである。ただし、ジョンソン氏がその厚意を同様に紳士的かつ真心を込めてシェイクスピアに返したかはわからない。彼は高慢無礼な性格で、名声を博して詩人として他者を凌駕する地位に就くと、自分のライバルと思しき者たちには悪意に満ちた目を向けていた。ときに自ら好んでライバルを褒めることもあったが、率直に褒めずに、ライバルの誤りや不注意な書き方、判断力の欠如について遠回しに言った。シェイクスピアの没後、最初に彼の著作集を出版した役者たちが、彼は一度書いたものを消したり訂正したりすることは減多になかったと言ってシェイクスピアを褒めると、ジョンソンは我慢できなかった。最良の発想を最も素晴らしい言葉に託し、自分が無限に努力して鍛錬を重ねても届かない域に達した優れた詩を、一度考えただけでいとも簡単に書ける才能の持ち主がいることを受け容れることができなかったのかもしれない。ジョンソンは優れた学者だったし、その点ではシェイクスピアに勝っていた。しかし、一方で、シェイクスピアが有した才能はジョンソンが書物から得た学識を超えていたと言って良いだろう。この点については、ある偉大な人物の言ったことが正しく、適切だと思う。ジョン・サックリング卿、ウィリアム・ダヴェナント卿、エンディミオン・ポーター、イートンのヘイルズ氏、そしてベン・ジョンソンが会したとき、シェイクスピア崇拜者を公言していたサックリング卿は、恩情溢れる言葉でジョンソンの批判からシェイクスピアを弁護した。そのとき、ジョンソンがシェイクスピアには教養がなく、古典となった文人の功績を知らないと言ってしばしば非難するのをじっと聴いていたヘイルズ氏は、遂に口を開いて彼にこう言ったのである。もしシェイクスピア氏が古典を読まなかったというなら、彼は古い文人から何も盗んではないということではないだろうか（この点をジョンソンは決して褒めなかったが）、と。そして、古典となっ

た文人の誰かが上手い言いまわしで語ったことを私が生徒に示すなら、同じ主題について同等に上手く表現したシェイクスピアの言葉を引いて示すだろう、と。{***} ジョンソンはというと、古典に書かれた場面をそのまま書き写して英語に翻訳しただけといえるほど古典文学を自由に使っていた。そして、ときには、自分自身が偉大な名声を得た詩人であるにもかかわらず、自分が借用した文人の功績を示すことすらしていない。もしジョンソンが『へぼ詩人』のある場面で描いている人物が本当にアウグストゥス〔・オクタウィアヌス〕とヴェルギリウスであるとするなら、誰もみたこともないほど不自然な皇帝と詩人である。一方、シェイクスピアはというと、模倣するは物語の筋のみで、他には誰に倣うこともしていない。描かれた出来事じたいも創作であることがしばしばあり、それを描く言葉はすべてシェイクスピア独自のものである。シェイクスピアの芝居にも、プラウトゥスの『百物語』から多くを借用している『間違いの喜劇』があることは確かだ。しかし、シェイクスピアが如何にしてプラウトゥスを使うことができたのか、私には謎である。というのも、すでに察していただけたように、シェイクスピアがプラウトゥスを原文で読むことができるほどラテン語ができたとは思えないし、彼の時代にプラウトゥスの英訳があったとも聞かないからだ。

私はシェイクスピア氏の著作について包括的で完全な批評をする積りはないので、以前にライマー氏が彼に対して述べた辛口の見解を、この場で取沙汰すべきではないだろう。ほとんどの部分において卓越し、古今あらゆる人々が尊敬し、崇拜し、そして未来の人々もそうし続けるだろう人物の欠点について、ライマー氏があれほど酷く非難する理由が私には正直、よく理解できない。ライマー氏の意図が、詩作法に関する自らの知識を誇示することで、虚栄心からそれを行っているのだとすれば、氏自身が自身の秀でた才能を示すべく書き下ろした悲劇の模範例や、また他者への指南として示した詩作の秘訣や規律には不完全な箇所がないのだろうか、疑ってしまう。もし、ライマー氏がシェイクスピアの作品によって自尊心を傷つけられたため、シェイクスピアの安定した名声を打ち壊そうと思ってあのような非難をしたのなら、その試みは無茶だったと認識しただろうし、人々は少なくとも氏の批評を好むのと同じようにシェイクスピアを愛していると知って無念を味わっただろう。しかし、紳士の身分でかつ性格も良い人物が、そのような意図を有するとは考えられない。ライマー氏の意図がどのようなものであったにせよ、あら捜しは知識人にとっては最も楽なことだから、よく分別をわきまえた、

人柄の良い紳士であれば、銜学者のするそのような見苦しいことはしないだろう。シェイクスピアの美しさを議論しようとする者なら、もっと魅力的で、かつもっと奥深い話ができるだろう。しかし、私は、他人の嗜好を指図する積りはないので、ここでは他人の価値判断について意見することは控え、シェイクスピアの芝居を概観して私が素晴らしいと思っているいくつかのことについて考察しておこう。

シェイクスピアの芝居は、喜劇と悲劇のみに分類するのが適切である。歴史劇と称されているものや、またいくつかの喜劇の中にも、実際には悲劇であるものや、喜劇の筋や要素が入り混じった悲劇もある。このように悲劇と喜劇を混合するやり方は誤りであるとはいえ、当時は普通だったのであり、イギリス人に好まれる様式となっている。それゆえに、そうした誤りを許容できない厳格な批評家がいるとしても、たいていの観客は型通りの悲劇よりも「悲喜劇」の方を好んでいると思われる。『ウィンザーの陽気な女たち』、『間違いの喜劇』、『じゃじゃ馬馴らし』は純粋な喜劇であるが、その他は、喜劇と称されていても、悲劇と喜劇の両方の要素を有している。シェイクスピアが悲劇、喜劇のどちらを得意としたのかはわからない。シェイクスピアの喜劇的ユーモアには大いに観客を楽しませる要素があることは確かである。それは、現代の風刺が万人の心に響くように当時のすべての階級の人々の琴線に触れることはなかったにせよ、シェイクスピアが労をとって描くことを良しとした人物は多面性を有していて、観客に好まれて人気も高い。例えば、フォールスタッフは万人が傑作と認める人物である。この人物は3本の芝居に跨って描かれているが、性格はうまく維持されている。また、『ヘンリー五世』の第1幕においてフォールスタッフの家主クイックリー女史が彼の死を語る際も、その語り方は極めて自然でありながら、フォールスタッフが登場する他の場面と同様に愉快である。このみだらな年寄りを描写してゆく考案段階において仮にシェイクスピアが何か誤りをおかしたとすれば、それは、この人物を泥棒でかつ偽善者、臆病者、自惚れ屋、そして端的に言って根っからの悪漢として描いておきながら、好きにならずにはいられないほど機知に富んだ人物に描いたことかもしれない。しかし、『ヘンリー四世』・第2部の最後に、王位を継承したハル王子がフォールスタッフを卑劣に扱うのをみて、それまで彼が観客を楽しませてくれた場面に思いを馳せるとき、この人物を哀れに思わない人はいるだろうか。シェイクスピアがフォールスタッフに与えた突飛な言行の中には、『ウィンザーの陽気な女たち』において彼が

鹿泥棒をする場面があるが、この場面を描写する際にシェイクスピアは、ここではシャロー判事として描いているが、ウォリックシャーで彼を起訴したかの人物を思い出していたのかもしれない。シェイクスピアはシャロー判事の紋章を、ウォリックシャーの古事記録〔『ウォリックシャーの古事』(1656)〕においてウィリアム・ダッグデイルが現地のある一族のものとして紹介している紋章によく似せて描いていて、ウェールズ人司祭がそれを延々と褒めて判事を喜ばせている。『ウィンザーの陽気な女たち』は全体的にも素晴らしい芝居である。多様な気質が描かれて均衡もよく保たれているし、フォードの道理に合わない勘ぐり癖の治療という主筋もとても上手い。フォールスタッフの恋文やスレンダーの

ああ、可愛らしいアン・ページ！

という台詞は、彼らの個性が良く現れた求愛表現である。『十二夜』では、空想屋の執事マルヴォーリオの人物像に比類なき愚かさと愛嬌が感じられる。『終わりよければすべてよし』に登場するパローレスのたかり癖と自惚れは、プラウトゥスとテレンティウスが描く同種の感情と同等に上手く描かれている。『じゃじゃ馬馴らし』のベトルーチオは、稀な気質の人物である。『空騒ぎ』のベネディックとビアトリスと『お気に召すまま』のロザリンドは、終始、機知に富んで威勢が良い。シェイクスピア時代の芝居には必ずといっていいほど道化が登場したが、シェイクスピアの道化は皆、とても面白い。『トロイラスとクレシダ』のテルシテスや『アテネのタイモン』のアベマンタスは、性格の悪い、嫌みたっぷりのがみがみ屋として描かれた人物の傑作と呼んで良いだろう。これらの人物に加えて、『ヴェニス商人』に登場する比類なき人物シャイロックをあげても良いかもしれない。この芝居はこれまで喜劇として認識され、喜劇として上演され、そして優れた喜劇役者がこの高利貸しを演じてきたが、シェイクスピアはシャイロックを悲劇的人物として描いていると、私には思えてならない。この人物の内面には、おそろしい復讐心と野性的な残忍性、敵意、そして忌々しい残酷さと質の悪さがはっきりとみてとれ、この芝居は喜劇の様式にも特徴にも合致していない。しかし、この芝居は、全体的にみて、シェイクスピア作品の最も完全なもののひとつであると思えるのである。筋はというと、箱選びとかかわる話やアントーニオが署名する常軌を逸した不自然な証文とかかわる話が含まれる点で、確かに、現実起こりうる話しという基準からかけ離れすぎている。しかし、その事実を認めたとしても、この話は非常に美しく

書かれていると思わざるえないだろう。アントーニオがバッサーニオへ示す友情からは、優れて高潔で、寛大かつ親切な彼の性格が垣間みえる。第4幕全体は、すでに述べたように、このような事実が本当にありうるとさえ仮想すれば、非常に良い話である。しかし、特に注目しておくべき台詞がふたつある。ひとつは、慈悲というものの素晴らしさを述べるポーシャの台詞、そして、もうひとつは、音楽の力について述べる台詞である。『お気に召すまま』に登場するジェイクイーズの憂鬱の言葉は、面白いと思わせる一方で、風変わりな日常耳にしないものだ。ホラティウスは、

日常のことを独自の言葉で表現するのは難しい、

と言ったが、人間の一生におけるいくつかの段階や年齢について考えることは、人は昔からしているし、またごく日常的にはしているが、シェイクスピアの書いた〔ジェイクイーズの〕この台詞より上手くそれを言葉で説明するのは極めて難しい。

——この世は舞台、そして、人は皆、
男も女も、俳優^{わざおき}の演じる人物にすぎない。
舞台上に登場しては、退場してゆく。
ひとりの人間は、生涯にいくつもの人物を演じ、
その生涯は七つの時代の幕からなる。まず、第一幕は、
乳母に抱かれて泣き、乳を吐きだす赤ん坊。
次の幕は、鞆^{しよ}を背負った泣き虫の小学生。
朝は明るい顔をしているが、学校へ行く足どりは、
まるで蝸牛^{かたつむり}だ。そして、次は、
焔のようなため息を吐ながら、恋人の眉を湛える哀れな小唄を詠む
恋する若者時代。すると、次は兵士の時代だ。
可笑しい誓いを並べ立て、豹のような鬣をたくわえ、
一心に名誉を求める。気性は荒くて喧嘩っ早く、
泡粒ほどの功名を立てるために、
大砲の火口にも突進する武者振りだ。しかし、次は、裁判官の幕。
恰幅が良く虚勢^{ケイボン}鶏のような太鼓腹になり、
眼光を鋭く保ち、鬣を奇麗に切りそろえて、
格言や最近の判例を並べ立てるようになる。

そんな人物を演じたかと思えば、続く第六幕では、
鼻に老眼鏡を載せ、腰には巾着をぶら下げた、
やせ細った草履履きのパンタローネへと早変わりだ。
大事にとっておいた若き日の長靴下も、
痩せた脛には大きすぎてぶかぶかで、
かつての男らしい声も、今では、発声する度に、
子供が恐る恐る吹く笛のように、ヒューヒューという音が混じる。
そして、この数奇で波乱の物語を締めくくる最後の幕は、
子供帰りと物忘れ。
喰いしばる齒も、眼も、好きなものも失う。

この台詞の生き生きとした描写はそのどこをとっても、そのひとつひとつが読者の眼前に立ち現われて手にとれるほど鮮明だ。敢えてもうひとつ、私がみたことのある台詞で最も独自のものだが、同時に最も力強い台詞の例をひとつ紹介しておきたい。その台詞が生き生きと描くものは、もどかしさである。恋する乙女の心境をシェイクスピアはこう表現した。

——いいえ、彼女は告白しませんでした。
薔薇の蕾に隠れた毛虫のような恋が、恥じらいで赤くなった頬を蝕み、
彼女は焦がれる思いに耽ってしまったのです。
しかし、忍耐の像のように鎮座して、
胸に叶わぬ思いを秘めたまま微笑みました。

なんと生彩を感じさせる言葉であろう。ギリシアやローマの最も偉大な詩人でも、この乙女の彫像に描かれた感情を言葉に託すのは難しかっただろう。概してシェイクスピア喜劇の様式は、人物を自然に描写し、理解しやすく、言葉も最も平凡で生彩があって読んで心地良いものである。ただし、『間違いの喜劇』や他のいくつかの芝居にもひとつかふたつの例がみられるように、不規則な韻を踏んでしまうことがある。ときにみられる押韻や言葉遊びは、シェイクスピアの時代にはよくあった悪癖であった。そうした悪癖は、当時の最も真面目な聖職者たちが行った説教にも修辞として使用されていた例もあるのだから、演劇ではそうした言葉使いが軽すぎるとは考えられなかったかもしれない。

しかし、シェイクスピアの才能の素晴らしさが最も顕著に現れるのは、彼が

想像力をあらゆる束縛から解き放し、それが人類の想像領域と現実世界での視覚的認知領域を超えた瞬間であることは確かだ。そうした瞬間がみられるのは、『あらし』、『夏の夜の夢』、『マクベス』、そして『ハムレット』である。前時代のシェイクスピア著作集の出版人は『あらし』を冒頭に置いたが、シェイクスピアが『あらし』を最初に書いた筈はない。私の見立てでは、『あらし』はこの種の芝居で最も完成度の高いもので、私たちが知っているシェイクスピアの芝居の中でも最も素晴らしいとって良いかもしれない。この芝居では、シェイクスピア作品によくみられる自由奔放さとは相俟って三一致が厳格に守られていることに、読者は気付くかもしれない。しかし、シェイクスピアの卓越した素晴らしさは法則を遵守することではない。この点については、シェイクスピア自身はおそらくほとんど気に留めていなかっただろうと私は思う。『あらし』は、このような芝居を書く際に重視すべき写実性からは大きく逸脱していると思うが、シェイクスピアはそれをとても巧みに行っているため、読者はいとも簡単に理性が許容する範囲を超えて作品世界に引き込まれ、描かれた出来事を信じたくなる。シェイクスピアの魔法は神聖で、そして優れて詩的である。非現実的なキャリバンの人物像は安定していて力強く、シェイクスピアがこうした特徴的な野性を有したこの人物を描く驚くべき創造力を有していたことを示している。キャリバンは、これまで芝居に描かれた人物のうちで最も繊細に描かれた最も奇怪な人物のひとりであることは間違いない。シェイクスピアはキャリバンの中に斬新な人間像を見出しただけでなく、新しい修辞法を考案して人物造形に応用しているという指摘は、3人の偉大な方々〈ロウの脚注：フォークランド卿、C・J・ヴォーン卿、およびセルデン氏〉の一致したものだとは私は聞いているが、この指摘は至極真っ当なものである。『あらし』にみられる個々の美点として、プロスペローが第1幕で語る話と第4幕でユノとセレスの仮面劇を中断してすぐにフェルディナンドに語る台詞、そして、第5幕で魔術を解き、魔法の杖を折る決意をする際の台詞を加えても良いのではないかと私は考えている。これまでに『あらし』は、ウィリアム・ダヴェナント卿とドライデン氏によって改作されている。この偉大な方々が行った判断についてここに列挙して批判する積りはないが、彼らが削除した部分には、削除しなくても済んだ部分、あるいは削除すべきではなかった部分もあるという指摘はしても許されるだろう。ドライデン氏はシェイクスピアの崇拝者だった。ドライデンとシェイクスピアの両方の作品を読んだことがある人なら、ドライデン氏がじつにシェイクスピアに多くを負っていたことがすぐにわかるだろう。公平を期するために、ここにドライデン氏がシェイクスピアについて語ったこと

を引用しておくべきだろう。

シェイクスピアは誰からも教わっていないが、
彼は、最初にフレッチャーに当意即妙の才を、努力家のジョンソンに技量
を授けた。
王が臣下に与えるように、シェイクスピアはこのふたりに法を与え、
自らは、ふたりがその筆で描きあげる自然となった。
フレッチャーはその身の丈まで育つものを捉えて、描くことができたが、
ジョンソンは地を這い、足もとのものしか描けなかった。
これがシェイクスピアを愛した者と、シェイクスピアをあざ笑う者の違い
である。
ひとりは最も多くシェイクスピアを真似て、ひとりは最も巧みにシェイク
ピアを真似た。
もし、ふたりが、後のすべての詩人を凌駕してきたとすれば、
それは彼らがシェイクスピアの筆からこぼれ落ちた墨で詩を書いたから
だ。
隣国の岸辺でやんだ大あらし^{*}は、
シェイクスピアの『あらし』に航海を教わったのだ。
フレッチャーの芝居の無垢な美しさは、
シェイクスピアが魔法をかけたこの島で微笑み続けたが、
フレッチャーには、その魔法は真似できなかつた。
魔法の効いたその島を闊歩できるのはシェイクスピアひとりである。
魔術で超自然の万物を動かす自由を
凡才に授けることは誰も望まないだろう。
私のこの試みも無謀だったと告白せねばなるまい。
シェイクスピアの力は、国王の力のように神聖なものだ。

ドライデン氏によって改作された『あらし』の序詞より

*ロウの脚注：フレッチャーの航海について言及している。

『夏の夜の夢』では妖精、『マクベス』では魔女、そして『ハムレット』では
亡霊が登場し、いかにもそれらが抱きそうな考えを尤もらしい話し方、そして
シェイクスピアの才能をもってしか書けない言葉で語るが、これもうえに述べ

た魔法である。この3本の芝居のうち『マクベス』と『ハムレット』について、ここではシェイクスピア氏の悲劇として注目してみたい。もし、この2本の芝居のもっとも優れた部分をアリストテレスが定着させたギリシア演劇の規則に照らして吟味すれば、すぐに非常に多くの誤りをみつけることができるだろう。しかし、シェイクスピアはいわば天賦の才能によってのみ導かれ、文献に記された規則を学ぶことはしなかったのだから、シェイクスピアが知らなかった規則に照らして彼の作品の良し悪しを判断するのは難しいのではないだろうか。私たちはシェイクスピアを、全人類にほぼ普遍的とって良い放埒と無知の状態、すなわち既定の判断基準が存在せず、皆が各々の想像力に身を任せて自由に筆を執っていた時代を生きたひとりの人間と考えなければならない。今の時代に上演されるに十分に相応しいと評価される芝居が、シェイクスピア以前にはひとつも書かれていないことを考えるなら、シェイクスピアの例によって劇作法がどれだけ向上したかすぐに理解できるだろう。悲劇的な詩や叙事詩の構成要素と考えられているもののうち、一般的には、最初に設定されるのは物語である。それは、物語の設定が劇作の構成要素で最も難しい部分だからという理由でも、また劇の構成要素のうち物語が最も美しい部分だからという理由でもなく、劇全体の構図や流れを考えるうえでまず物語を最初に設定すべきだからだ。そして、物語に合わせて、個々の部分の適切な配列や順序を考案し、それらに加えてゆく脚色も考えるべきである。しかし、シェイクスピアがその力と技量を発揮しているのは劇作のこの部分においてではないので、私はここで物語設定についてシェイクスピアの欠点を数えあげるような退屈で質の悪いことをしたくはない。シェイクスピアは物語を自分で作ることはほとんどせず、史実や小説、ロマンスのいずれかからとっている。そして、拝借した物語の作者がそれを書いた順序や描かれた出来事、また物語における時間の流れを、たいていはそのまま使っている。例えば、『ドラートゥスとフォーニアの愉快的物語』という古い本を題材とする『冬物語』は、原話の筋に従って、16年もしくは17年の歳月が描かれ、描かれる場面はときにはボヘミア、ときにはシチリアへと移動する。歴史を扱ったシェイクスピアの芝居のほとんどは、長い歳月にわたる出来事を描いたもので、またそれらの出来事は地理的にも離れて特徴も異なる場所で展開される。『アントニーとクレオパトラ』はローマ帝国の最も広大な領域を跨いで展開している。しかし、この点におけるシェイクスピアの無頓着は、劇作の別の構成要素で補われている。シェイクスピアは登場人物をその性格に相応しい行動や言動を発するように描き、またその描写において詩人としての手腕を発揮する。こうした点については大抵の批評家は良し

とするだろうし、また彼らが絶賛する箇所も非常に多いのではないだろうか。イングランド史やローマ史を題材とする芝居では、シェイクスピアの描く登場人物たちは、誰がみても歴史家が思い描くその人物像と同じである。シェイクスピアの芝居ではひとつの主題をとりあげてひとつの筋を展開することはしないため、彼の本には「これはジョン王、リチャード王等々の生涯である」といった標題がしばしば付けられている。現代の歴史家たちが思い描くヘンリー六世の人物像に最も近い人物は、シェイクスピアの描いたヘンリー六世なのである。私たちが抱く歴史上のヘンリー六世のイメージは、まさにシェイクスピアの物語が描くその人である。この王は現在でも、あらゆる記述において、愚直で消極的だが信心深く、勇気はなく芯の弱い王であり、堂々たる妻や支配的な徒党に簡単に屈する王として語り継がれている。しかし、シェイクスピアはさらに加えて、この王の善良な気質も公平に描いている。敬虔で公平無私、かつ厭世的で、神の摂理による厳格な秩序を頑なに守ろうとする王の性格を描くことで、観客の憐れみをも誘っている。『ヘンリー六世』・第2部に素晴らしいと賞讃したくなる描写がある。グロスター公爵を殺害したポーフォート枢機卿が死の床で最後の苦しみを味わうシーンで、その傍らで善良な王が枢機卿のために祈っている。一方の人物は恐怖を感じ、もう一方の人物には優しさと心を動かす信心深さがある。恐怖を感じる心かまたは憐れみの心がある人間なら、誰しもが感動するだろう。『ヘンリー八世』では、王ヘンリーは、その統治時代について記述したあらゆる文献が伝えるように、寛大な御心と善良な人格を有した王として描かれている。美德と同じだけ王の欠点も描かれ、この王の存在が放つ眩い光によって生じる影なる部分は不自然に消去されているが、その理由は、作者が影を付ける絵具を持たなかったからでも、光と影の配列を描く技術を持たなかったからでもない。エリザベス女王への配慮から、シェイクスピアは影を描かったというのが真実ではないかと私は考えている。自身が仕えた亡き女王陛下の父君を舞台にかけるのだから、描き方によっては礼儀に反するだろう。一方、この偉大な王に仕える司祭を描くシェイクスピアはより自由に筆を振った。その結果、ウルジー枢機卿の人物描写は、それまでに描かれたどの人物よりも巧みな描写となっている。ウルジーは専制的で残酷、そして、順境のうちには傲慢な人物に描かれているが、失脚してゆく場面では、見事な演説を述べて民衆の憐れみを誘う。第4幕第2場では、悪徳と美德を備えたこの人物の全体像が上手く、そして正確に描かれている。キャサリン王妃が置かれた同様の苦境もまた、とても心を打つものである。シェイクスピアの巧みな描き方によって、観客は王妃への処遇は不当だと考えて王を非難することはないが、キャ

サリン王妃が生まれながらの身分とその美德に相応しい運命に預かってほしかったという思いに至る。シェイクスピアはまた、ローマ史を題材とする人物の性格描写においても、同様の巧みな描写をしている。コリオレイナスの傲慢さと短気な振る舞い、その勇氣ある行動と平民をみくだす態度、そしてブルータスの美德と哲学者気質、またマーク・アントニーの一貫しない気高さがその見事な証左である。そのうち特にブルータスとマーク・アントニーの描写は、シェイクスピアがこのふたりの人物描写を間違いなく模倣しているプルタルコスが描く通りのものである。シェイクスピアは原話に忠実に従ったうえで、芝居に散りばめることができるいくつかの些細な出来事を取り込んでいる。しかし、すでに示したように、シェイクスピアは、原話からひとつの大きな筋をとって作品を書くだけというよりはむしろ、偉大な人物をその生涯に起こった数々の運命的出来事や事件を通して描きあげるという点に工夫を凝らすことが最も多いように思える。一方、シェイクスピアの芝居には、物語がひとつの筋に基づいて展開されるものもある。具体例として、『ロミオとジュリエット』、『ハムレット』、『オセロー』がある。『ロミオとジュリエット』の構図は単純で、ふたつの一族が長きにわたって無分別な反目と敵対を続け、多くの血を流してきたことに対して天罰が与えられるというものである。しかし、話の展開において、シェイクスピアは恋人の愛を優しく情熱的に描き、彼らの苦悩を痛ましく描くというやりくりをしている。『ハムレット』は、ソフォクレスの『エレクトラ』とかなり似通った物語に基づいて書かれている。このふたつの芝居において、若き王子たちは父親の死を復讐しようとしている。ふたりの王子の母親は同様の罪を犯していて、各々の夫の殺害にかかわった後にその殺害者と結婚している。ギリシア悲劇では、その冒頭部分に描かれるエレクトラの悲しみには心を動かすものがあるが、ダーシエ氏が指摘するように、ソフォクレスは後半になると王女とオレステスにあまりにも非人情で衝撃的な振る舞いをさせる。オレステスは自分の手に母親の血をなすりつけるが、この野蛮な行為が舞台上で演じられることはないとはいえ、観客はクリュタイムネーストラーがアイギストスに助けを求め、息子に慈悲を求めて叫ぶ声を聴く。クリュタイムネーストラーの娘であり王女であるエレクトラは、どちらであってももっと体面を保つべき人物だが、舞台上に立って弟に父殺しを促す。この振る舞いはただ怖いだけである。クリュタイムネーストラーは質の悪い女であって、死に値する。いや、それどころか、原話ではクリュタイムネーストラーはじつの息子に殺される。しかし、舞台でこのような筋を展開するのは、芝居が従うべき人間の行動原理に反することは明らかだ。他方、これと対照的なシェイクスピアの

処理法を少しだけみてみよう。ハムレットは父に対してオレステスと同様の孝心を持ち、また父の死を復讐する決意を持っている。そして、母の罪に対しても同様の憎悪を抱いていて、またその感情は母の近親相姦によってさらに強化している。しかし、ここがシェイクスピアの素晴らしい手腕であって、正確な判断なのだが、ハムレットは母に手を下すことはない。ハムレットが母に手をかけることがないよう、シェイクスピアは父の亡霊に復讐のその部分を禁じさせたのだ。

だが、いかにしてその行動を成し遂げようと、
汝の心を穢してはならぬ。母に危害を加えようとは考えるな。
母のことは天の采配に委ね、
その心を咎める棘に苛まれる運命に
すべて委ねよ。

この処置によって、^{Horror} 怖れと^{Terror} 畏れの間には線引きがされることになる。悲劇に相応しい感情は「畏れ」であって、「怖れ」を抱かせないよう劇作家はいつも注意しておく必要がある。しかし、観客の心に畏れを呼び起こすという技において、シェイクスピアほど成功した者はいないことは確かだ。『マクベス』の全体をみても、あるいは、より具体的には第2幕の王暗殺の場面をみると、『ハムレット』を書いたシェイクスピアの勇ましさが見事に現れている。シェイクスピアの筆は、私たちの魂を最大限に振幅させる強大な力を持つことがわかる。私たちの時代の劇場では、ハムレットを演じるベタートン氏の素晴らしい演技によってシェイクスピアのこの傑作がはっきりとその特色を現したが、ここで『ハムレット』の話を終える前にそのことに触れないわけにはいかない。ベタートン氏は多才な役者であるが、ひとりの人間の素質がシェイクスピアの人物を上手く演じることだけだったとしても、その秀でた素質がひとつあれば、その人はあらゆる文人たちと同等の評判を勝ち得るに違いない。ベタートン氏ほどシェイクスピアの表現方法に通じている人はいない。氏は実際にシェイクスピアをよく研究し、熟知している。そして、どの人物を演じるにも、シェイクスピアがその役を氏が演じると想定して書いたかのように演じている。私がここに書き綴った文章のうちシェイクスピアの生涯とかかわる記載は、ベタートン氏に負うところが最も大きいことを特記しておかなければなるまい。シェイクスピアへの尊崇の念から氏は、これまでに、ウォリックシャーへ赴き、氏が偉大な作者と認める³「シェイクスピア」なる名前との関連でそこに残っていて

入手できる資料を収集した。私は、先に述べたように、ライマー氏とシェイクスピア批評を巡る論叢をはじめ積りはないので、氏が『オセロー』について述べた見解の正しさについてうんちくを語る真似はしたくない。ライマー氏は確かに、『オセロー』の欠点について思慮深い指摘をしているし、それが欠点であると大多数の人が思うことも事実だろう。しかし、ライマー氏には同時にシェイクスピアの美点もいくつかあげてほしかったと思う。そうしてこそ、正確で公正な批判だと私は思うからだ。全体において美点をひとつも認めないのは可笑しな話に思える。シェイクスピアが描く物語と出来事がライマー氏の嗜好に合わないとしても、シェイクスピアの配慮のしかたはどこをみても優れて高貴なもので、言葉使いは勇ましく、そして適切である。じつにここがシェイクスピアが賞讃されるべき点であって、この点について疑義をさしはさむことは至難といえるだろう。シェイクスピアの感情や万物の描き方は素晴らしく、自然である。そして、その表現方法は（ときに一貫性を欠くこともあるかもしれないが）正しいし、主題や状況に応じて強度が適切に変化する。その例を無限に列挙することは可能だが、シェイクスピアの本はすでに万人の所有物となっているので、ここで私がそのどれひとつを論じたとして、その解説はもはや余計なものになってしまうだろう。

{その生涯の最後には、分別のある人間なら誰しもがそうしたいと思うように、シェイクスピアは隠居し、ゆったりと友と語りながら晩年をすごした。シェイクスピアは自身が必要とした、そして、その点においては、彼が欲しいと願うだけの不動産を買う富を得ていて、没する前の数年間は生まれ故郷のストラットフォードで生活したと伝わっている。人を喜ばせる詩の才能と良き人柄によって、シェイクスピアには馴染みの友ができ、地区の紳士たちとも親交をもった。なかでも、コーム氏といって近隣では富豪で高利貸し屋として知られていた紳士と特に親しく交流したという伝説をうっすらと記憶している人が、ストラットフォードには今もいる。数人の友と歓談していたとき、コーム氏は笑いながらシェイクスピアにこう言ったそうだ。私がたまたまあなたより長生きしたら、墓碑を書いてくれる積りはないかと思うのだが、と。さらに、死んでしまってからでは自分について何と書かれているかわからないので、今すぐにそれを書いてくれないだろうか、と続けた。するとシェイクスピアは、この詩を即興で読んだという。

一割の利子をとる大ばら男が、lies here ingrav'dここに黙る。

十に百の確率で、魂の救済はなし。

墓で黙るは何某ぞ、と尋ねる者ありゃこう言いな。

悪魔が笑った、あほ、あほ、と。ここに黙るはうつけのコーム。
John-a-Combe [＝コーム家のジョン]

この鋭い風刺はコームの心にぐざりと刺さり、コームはシェイクスピアを許さなかった。

シェイクスピアは53歳で没し、ストラットフォードの大教会内陣の北側に埋葬された。その教会には、横板に記念碑が刻まれて壁に掲げられている。地面の墓石にはこう刻まれている。

友よ、イエスにかけて、ここに納まる遺骨を掘るなかれ。この墓石に触れぬ者に祝福を、わが骨を動かす者には呪いあれ。

シェイクスピアには3人の娘があり、うちふたりが生存して結婚した。年長の娘ジュディスは、トマス・クィニー氏という人物と結婚して3人の男子を産んでいる。しかし、その3人の孫たちはいずれも子に恵まれなかった。シェイクスピアのお気に入りだったジュディスの妹スザンナは、ストラットフォードで評判の良かった医者、ジョン・ホールと結婚した。スザンナにはひとりだけ子がいたが、女子だった。この孫は、最初は郷土トマス・ナッシュの妻となり、後にアビントンのジョン・バナード卿と結婚したが、ジュディスと同様に子孫は残さなかった。

シェイクスピア自身やその一族について私が知りえたことで少しでも重要と思われることは、以上である。シェイクスピアの人となりは、その作品をみれば一番良くわかる。しかし、シェイクスピアの人となりについては、ベン・ジョンソンが『発見』に試論のようなものを書き残している。すでに示したように、ジョンソンは友に対する誠意を欠いてはいるが、彼の文章を敢えて文字通り引用しておこう。

シェイクスピアはものを書く際に（それがどのような書き物だったとしても）一行も消したためしがないと、しばしば役者たちがシェイクスピアを持ちあげるかのように言ったのを覚えている。千行は消してほしかったと私はこれまでこたえてきたが、役者たちはそれを悪意ある発言だと思っ

ていた。私はそれを書き残すことはなかったが、しかし、そのために、役者たちは消さなかったことが誤りであることを知らず、友のその最大の誤りをあげて友を賞讃していた。しかし、私の正直さを正当化するために書かせてもらおう（一方的な偶像崇拜であるが、私はシェイクスピアが好きだったし、その御霊に礼を尽くしたい気持ちは、皆と同じである。）シェイクスピアは、じつに腹蔵のない男で、気持ちを隠すことも遠慮もせず、非凡な想像力と華麗なる気まぐれ、それにこなれた表現力を備え持ってしまったため、あのようにすらすらと書いたのだが、ときには誰かが止めてやるべきだった。皇帝アウグストゥスはハテリウスについて語る際に、Sufflammandus eratと言ったように。シェイクスピアの詩は力任せのものだったが、それを制御する力がほしかった。しばしば彼は、例えばこんな風に、人が失笑せずにはいられないような過ちをおかした。シーザーの相手役がシーザーに、

シーザーよ、それは酷い仕打ちではないか

というと、シェイクスピアはシーザーに、

シーザーは、正しい理由なしに間違った仕打ちはしない。

と言わせたが、これは滑稽であった。しかし、彼の悪い点は美点によって補われた。赦しを乞うべきところよりも賞讃に値するところの方がずっと多い。

ここでジョンソンがシェイクスピアから引いている箇所だが、これに似たやりとりが『ジュリアス・シーザー』にあるが、このような滑稽な誤りは見当たらないし、私がみたどの版にも、ジョンソン氏が引いているような誤りは見当たらなかった。本書に収録した芝居の他、ラングベイン氏がシェイクスピアのものとしている芝居が2本か3本あるが、私はそれらをみたことがないし、またそれらについては何も知らない。シェイクスピアはまた、『ヴィーナスとアドウニス』と『タークインとリュークリーズ』という物語詩も書き、それらは最近出版された詩集に収録されている。ベン・ジョンソンが伝えるシェイクスピアの人となりについては、かなり当たっているところもある。しかし、ギリシア悲劇を規範として（というより、実際には翻訳して）最初に悲劇を書いた

ローマ人たちにホラティウスが言った、『アグストゥスへの手紙』のこの言葉を引いた方がよかっただろう。

ローマ人は実験を試み、古典をうまく翻案できないものか確かめた。

そして、生まれつき高貴で鋭敏な感覚を有していた彼らは、

翻案が気に入り、悲劇的情緒がより力強く描かれたことを好ましいとも考えた。

しかし、書生だった彼らは、手本の書き換えを恥と考えて尻込みしてしまった。}

ウィリアム・シェイクスピアの名前を冠して 1640 年に出版された詩集があるが、私はごく最近までそれをみたことがなく、ゆっくり吟味する機会に恵まれてもいないので、この詩集が本人のものなのかどうか、知ったふりをすることは控えておきたい。

訳註

- ¹ ホラティウスのこの詩は、当時文法学校で広く使用されていた William Lily の *Grammar* に由来すると考えられている。
- ² Rowe の原文は “Eunuchs”。Pope は “singers” としている。
- ³ 「偉大な作者と認める」の原文は ‘for which he had so great a Value’。Pope の改訂版では ‘for which he had so great a veneration’ となっている。